

第34回 郷土の先賢顕彰者紹介

3階 郷土先賢室



文字性と造形性との 葛藤の中を生きた前衛書家

みやざき しげみ
宮崎 重美 (1930~2013)

宮崎重美は、昭和5年(1930)8月16日、五箇山、東砺波郡平村(現南砺市平)に生まれた。昭和20年(1945)、山村農業の改善を構想して富山県立福野農学校に入学(現南砺福野高等学校)するも勤労動員の日々を過ごし終戦。父が勧めてくれた通信教育の書道に熱中するようになり、学校に書道クラブを結成、部員100名余のリーダーとなっていた。

当時、県内には戦火を避け疎開した文化人が多数居住し、戦後の解放的な雰囲気の中、砺波地方においても様々な出会いが文化の新たな動きを生み出していた。昭和22年(1947)秋、宮崎は学校の寄宿舎の玄関で表立雲と出会った。表は農機具商のかたわら砺波地方で書道の革新を志す先駆者であったが、その書への見識、揮毫の奔放さ、書の因習を打破しようとする気迫に圧倒され、それが書道の革新運動に目覚める契機となった。そして版画家の棟方志功や前衛書家の大澤雅休と出会い、棟方からは学園祭に出品した古典臨書『牛欄造像記』を称賛され、書とは何かを探求する扉を開き、また、大澤には師事し、書の芸術創造の心と熱意ある指導・激励を受けて、書に生きようとする信念を持つに至った。

昭和24年(1949)秋、請われて平村に戻り小学校の冬季分教場の臨時教員となり(翌年正式採用)、物資が乏しい中、「書」を書き続けた。同26年(1951)棟方が福光を去り、同28年(1953)には大澤が東京で病死。寂しさと孤独に耐えながら自らの書をひたすら求め続け、同28年第6回書道芸術院展において院賞を受賞した。

そして、昭和35年(1960)、『脈-60』で、第3回毎日前衛書展 前衛大賞を受賞した。ところが、これを機に、受賞作および約10年間に制作した大部分の作品を、自らの手で焼却した。創造が競争の論理に巻き込まれることへの自戒であった。

その後、積極的な書作活動のため富山市へ移住。昭和45年(1970)、富山県書道連盟委員長就任を契機に、中央や県内の書壇との関わりを絶ち、団体展から離れ、発表の場を個展中心へと移していった。これは、それまで関わっていた前衛書の運動が、自らが否定していたものをつくり始めたことに強い反発を感じ、そこから離脱し、独行の道を歩むことにしたのである。中でも創作理念・方法の面では、前衛書が造形性を追求するあまり、書の本質である文字性を放棄してゆく流れを批判し、文字性と造形性との葛藤の中から、自分だけの書を生み出そうとした。墨の濃淡を生かした気力あふれるもので、文字としてのぎりぎりのところで造形的創造を試みたのである。

昭和55年(1980)、県書道連盟30周年を機に『富山県書道人志』(全5巻)の刊行を提案。その編纂に携わり、県書道文化の流れや先駆者のあゆみを記録に残し、後世に伝えることに尽力した。流派ごとに考え方が根本から異なる「書」について、どの流派にも属さず、書人としての高い見識と実力を兼ね備えていた宮崎だからこそ成し得た事業だと言える。平成3年(1991)3月、富山市立四方小学校長を最後に退職。同年秋には、多年にわたり書道の研鑽に励み、優れた作品を数多く制作するとともに、広く県芸術文化の振興発展に貢献したとして、県教育委員会芸術文化功労者表彰を受けた。

その後も精力的に創作を続け、平成25年(2013)死去。都会的猥雑さとは無縁の「五箇山人」としてのハングリー精神そのままに、生涯、書くことの根拠を自らに問い続け、純粋な創造のみに向かおうとする姿勢を貫いた。まさに「野を生きた書人※」そのものであった。享年82歳。 ※南砺市立福光美術館企画展タイトルより

<専門員 平野 強>



自宅にて



『富山県書道人志』全5巻
富山文庫『五箇山』
開いてある本は『富山県書道人志4』右ページは「脈-60」